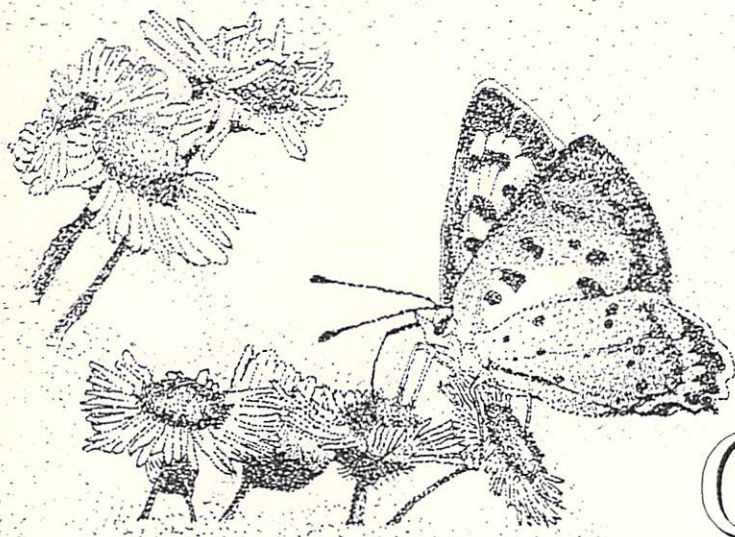


HITOTSUBATAGO NO. 9

ヒトツバタ



9

対馬生物研究会

December 1993

レッドデータブックに見られる

対馬の野生脊椎動物

うらた あきお
浦田 明夫

I. レッドデータブックとは

日本は南北にのびた列島であり、数多くの島嶼から成り立っている。従ってそこに生息する野生動物相は、他の国々に比べて非常に多様性で豊富である。しかし、現在の野生動物相はその豊かさを急速に失いつつある。そこで多様で豊富な生物を保護し、その生息地と共に次代に引き継ぐことは、現代の我々にとって大きな責務である。

種の絶滅を防止するには先ず、その種の現状を知り把握することが必要である。このため IUCN (国際自然保護連合) によって世界の絶滅のおそれのある種の現状を明らかにした資料である。レッドデータブックにより、日本版の野生生物の保護対策資料がまとめられた。

昭和61年より4年間環境庁によって「緊急に保護を要する動植物の種の選定調査」が実施され、

- ① 我が国における絶滅のおそれのある動植物の現状
- ② 本邦産野生動植物の種の現状 (全種の目録と分布)

がとりまとめられている。この結果、脊椎動物だけでも250種、亜種が絶滅のおそれのある種あるいは希少種として選定されている。

II. 種選定の 카테고리区分

日本版レッドデータブックは、種の選定と共に選定種の 카테고리区分は

基本的には I U C N に準じ、5 つに区分している。

(1) 絶滅種(Extinct)

我が国ではすでに絶滅したと考えられる種または亜種

(2) 絶滅危惧種(Endangered)

保護に留意すべき地域個体群

地域的に独立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの

Ⅲ. レッドデータブック選定種とその種数

絶滅のおそれがある野生生物のうち、脊椎動物の種と種数は表のとおりである。

レッドデータブック選定種数

	ほ 乳 類	鳥 類	は 虫 類	両 生 類	淡 水 魚 類
E x	5	1 3 <small>キタキ</small>	0	0	2
E	3 <small>ツシマヤマネコ</small>	2 7	1	2	1 6
V	1 1 <small>チョウセンコジメ ツシマテン</small>	2 7	2	4	6
R	3 6 <small>ツシマクロアカウモリ クチバテンゴウモリ ツシマジカ</small>	6 5	1 3	8	1 7
L p	1 3	0	0	5	7
合計	6 8	1 3 2	1 6	1 9	4 8

E x : 絶滅種

R : 希少種

※表中の数字はレッド

E : 絶滅危惧種

L p : 地域個体群

データブック記載種

V : 危急種

(亜種を含む)の数

哺乳類では68種・亜種選定されているが、対馬産に関するものでは表中に見られる6種が選定されている。

鳥類では132種が選定されているが、このうちキタタキは絶滅種とされているが、これ以外には鳥類には対馬に限って分布するものや固有種はなく、他の地域と共通しているものばかりである。

爬虫類は16種、両生類19種、淡水魚類48種が選定されているが、対馬には該当するものはあがっていない。対馬産の爬虫類ではアムールカナヘビなどいずれかのランクに該当するのではないかと思われるが、選定を受けていない。爬虫類、両生類は西南諸島産のものが、そのほとんどを占めているようである。

Ⅳ レッドデータブックにリストアップされている対馬の哺乳類

レッドデータブックは種の存続に赤信号のついた野生動物をリストアップ、保護に役立てようとするもので対馬の哺乳類では表にみられる6種が選定されている。

(1) 絶滅種

50年以上その生存記録のない種でニホンオオカミなど5種がこれに該当しているが、対馬産では鳥類でキタタキがあげられているだけである。

(2) 絶滅危惧種

「現在知られているすべての個体群の存続が危ぶまれており、生息地のすべてで生息条件が悪化している」という現状が最近の調査で明らかにされているツシマヤマネコ、イリオモテヤマネコ、ニホンカワウソの3種をあげている。

ツシマヤマネコ

〈摘要〉

日本では対馬のみに分布する。本種は純肉食性かつ単独生活者で、対馬の個体群は極めて小さいと推定されているので、生活環境が現在以上に悪化すれば容易に絶滅する恐れがある。

〈学術的意義と価値〉

本種はベンガルヤマネコとスナドリネコの中間の形態を示すとの見解があり、分類学的に貴重なばかりではなく、対馬の個体群は生物地理学的にも価値が高い。

〈生存に関する脅威〉

1902年頃までは対馬に多かったが、本州からの猟犬が移入されたため、たちまち減少したといわれる。自然破壊による食物と巣巢に適した地域の減少、ノイヌの増加、イエネコによる感染症の伝播などが生存に脅威を及ぼすと考えられる。

(3) 危惧種

生息地の大部分が生息条件または生息環境が悪化しており、近い将来絶滅危惧のランクに含まれる可能性が大きいものを挙げ、チョウセンコジネズミは確認記録は少ないものの、生息環境も改変されやすい場所であり、ツシマテンはツシマヤマネコと共に緊急に保護を要する種とされた。

チョウセンコジネズミ

〈摘要〉

ユーラシアの南部に広く分布するコジネズミの一亜種、本亜種は朝鮮半島、対馬に分布し、対馬では河畔や濃耕地周辺などに生息しているため生息環境が改変されやすく、また生息数は比較的少ないため種の保存は安泰とは言い

がたい。

ツシマテン

〈摘要〉

朝鮮半島から本州、四国、九州に分布する一亜種、対馬全域に分布し、林地に近い住宅地や林縁部の耕作地に出現するが、基本的な生息地は森林。哺乳類、爬虫類、両生類から昆虫類、甲殻類、植物質のものなど食性は多様である。人口林の増加により良好な生息環境である広葉樹林が減少し、採食路の発達により交通事故死が増加している。

〈学術的意義と価値〉

日本と朝鮮半島の一部の地域のみで生息するテンの分布進化を大陸産のテンとの比較において調査研究をすすめる上で貴重な存在である。また島嶼における種分化の研究材料としても重要である。

〈生存に関する脅威〉

交通事故が多発している。また、多様なエサである動植物をもたらししている広葉樹林のエサ量の減少、多様性の低下となる針葉樹人工林への転換がすすんでいる。採食地としての利用頻度の高い耕作地－林地の縁部が過疎化の進行、耕作地放棄により失われつつある。

(4) 希少種

現在のところ(2)や(3)にも該当しないが、生息条件の変化によって容易に上位のランクに移行するような要素を有するもの。

ツシマクロアカコウモリ

〈摘要〉

基産地は巖原町、日本では対馬だけに分布する。低木林から採集され、個体数は少ない。朝鮮半島に生息する同種は洞窟に少ない。

クチバテングコウモリ

〈摘要〉

テングコウモリ、コテングコウモリと異なり、尾膜に毛がない。腫骨に明らかに後葉があり、体色は暗褐色、前二種より光沢がない。基産地は上県町佐護。採集個体は模式標本のみ。南方系種。

ツシマジカ

〈摘要〉

ツシマジカは1976年に本土産と異なるということで別種に分類された。1966年県指定の天然記念物から、1987年に一部地域に限定する地域指定の天然記念物に指定変更された。現在、指定地域外で年間100～325頭が捕獲されているが、島嶼に分布が限定された個体群であり、適切な個体数レベルが維持されるような配慮も必要である。

V 原因解明への対策を

熱帯雨林の破壊など地域規模の環境問題が早急な対策を迫られている中で、毎日一種が滅びていく野生生物の種の減少も重大な課題で、環境庁のレッドデータブック日本版は国際、国内の両面で保護対策に欠かせないものになっている。

脊椎動物では日本産の既知種1243種を調査対象としてほぼ100%を網羅し、そのうち283種を絶滅の恐れのある野生生物として選定している。対馬産は上記の通り6種が選定種となっている。

しかし哺乳類ではツシマクロアカコウモリ、クチバテングコウモリを挙げているのに、ほぼ同格のコウライオオアブラコウモリがもれていたりと、爬虫類ではアムールカナヘビなども含めてもよいのではないかとも思われる。

近いうちに無脊椎動物についてのレッドデータブックがまとまると思うが、日本では対馬特産のものとして、次のものがリストアップされている。

いずれも希少種（R）としてリストアップ

ツシマフトギス、チョウセンケナガニイニイ、ツシマカブリモドキ、キン
オニクワガタ、ツシマウラボシシジミ - 5種 -

なお本文は環境庁編「日本の絶滅の恐れのある野生生物」（1991）より抜
粋したことを明記しておく。

（琴海高校）

むしめがねNo.1 『ヤマネコの給餌活動』

現在、上県町において山村・谷口両会員ががんばっておられます。もうこれ以上待てない、という切実な思いが両会員を給餌活動にかり立てているのではないかと思います。

活動を通してビデオ撮影されたものの中には、ヤマネコの親子の姿やヤマネコとテンとの餌の奪い合い等、学術上においても貴重な資料が得られています。

給餌活動は根気と忍耐が勝負ということですので、私みたいながうたらにはできそうもありません。両会員には健康に十分気をつけていただきたいものです。特に、谷口会員にはお願いします・・・・。

庭に蝶を呼ぶ

うらた あきお
浦田明夫

蝶とのかかわり合いをもつようになって、かなりの年月が経つ。かつては野に山に行けば比較的容易に見られたであろう蝶たちも、戦後の急速な開発と植物群落の遷移で少しずつ様相も変わり、蝶相も変遷してきている。九州では対馬にしか分布しない小形のセリチョウであるホシチャバネセセリは、厳原の砥石淵の上の方から上見坂へ登る旧道、そして上見坂一帯と白岳へ行く途中の草地にはかなり見られていたが、今ではそこらは植林されたり、陽樹が繁り、ホシチャバネセセリの生息にはその条件を満たすことはできなくなってしまっている。

蝶が生息するには環境条件と共に成虫の吸蜜植物（訪花植物）や食餌植物の存在が要素である。

さて、長崎の小高い丘の上に私のささやかな家がある。私は家を建築する時、庭で蝶の自然観察ができればと考えていたが、長崎の地ではそう思うように地球の表面積を手に入れることができないのが現状である。その小さな場所に植林を依頼したところ、庭師は松、梅、サザンカ、ビャクシン、クログネモチ、イヌカヤ、ツゲを植栽してくれた。これでは蝶が来てくれる要素はほとんどない。そこでその後は、自分で好みに応じてサボン、ブッドレア、ヒラドツツジ、ホトトギス、カンアオイ、エビネ類などを植え込み、徐々に庭らしさを整えるようにした。

蝶に来てもらうためには吸蜜花としての訪花植物、そして幼虫の餌となる食餌植物を用意することである。中でもブッドレアは和名をフジウツギとい

い、また蝶の木と言われるほど数多くの蝶が集まることで知られている木で、花も白～紫まで各種そろっており、庭をにぎあわす上にも効果的な植物である。ただ、数年も経つとかなりの大きさに成長するので、毎年せん定し、伸長をおさえる必要がある。また、ツメレンゲやマンネングサの仲間を植えた。これはクロツバメシジミを誘うためのものである。クロツバメシジミは対馬の各地に比較的普通に見られるが、本土では珍しく、環境庁の出しているレッドデータブックによると、ツシマウラボシシジミと共に希少種として取り扱われている種で、長崎県では対馬を除いて、1955年に私が長崎市で発見したものである。当時は九州では大分県に記録があるだけのものであった。ところが、この珍蝶が我が家の庭に訪れたのである。

庭のすみにザボンを植えている。これはザボンの収穫と共に、特にナガサキアゲハを呼ぶためのものである。植えて10年以上経つが、その間少々留守していたこともあるが、収穫は1990年2個のみ。花が咲いても結実してくれず、専らアゲハ類の食草として用いるだけに終わっているようである。その他、カノコユリ、オニユリ、オウゴンオニユリ、タカサゴユリ、スカシユリ、ホトトギスなども植えこんでいる。ユリ類にはアゲハ類が飛来し、オニユリとホトトギスにルリタテハが飛来産卵し、庭のユリ類とホトトギスを食草として成育した。

庭の雑草としてカタバミがある。これにヤマトシジミがやって来るし、プランタに植えたパンジーとビオラにはツマグロヒョウモンの幼虫が多数見られ、羽化した。ミカドアゲハのために植木鉢にオガタマを植えたが、成長しないためか目的は達せられないままである。サンショウにはアゲハチョウが産卵した。オオアラセイトウにスジグロシロチョウを期待している。

蝶を呼ぶために植えた植物と
飛来した蝶

〔訪花植物〕	〔飛来した蝶〕
ブッドレア	アカタテハ、ヒメアカタテハ、キタテハ、ミドリヒョウモン、メスグロヒョウモン、ツマグロヒョウモン、ウラギンスジヒョウモン、ヤマトシジミ、ルリシジミキチョウ、モンシロチョウ、アゲハ、クロアゲハ、モンキアゲハ、ナガサキアゲハ、キアゲハ、アオスジアゲハ、イチモンジセセリ、チャバネセセリ、アオバセセリ、キマダラセセリ、クロセセリ
アベリア	イチモンジセセリ、アゲハ、クロアゲハ、モンキアゲハ、カラスアゲハ、ツマグロヒョウモン、アカタテハ
ヒラドツツジ	アゲハ、クロアゲハ、カラスアゲハ、ナガサキアゲハキアゲハ、アオスジアゲハ
カタバミ	ヤマトシジミ
ヒャクニチソウ	アゲハ、ツマグロヒョウモン
ポーチュラカ	キアゲハ、ヤマトシジミ、ルリシジミ
オニユリ	アゲハ、キアゲハ、クロアゲハ、カラスアゲハ
オウゴンオニユリ	ナガサキアゲハ
タカサゴユリ	
カノコユリ	
コスモス	アゲハ、アカタテハ、ツマグロヒョウモン
ツワブキ	ベニシジミ

[表1-1]

〔食餌植物〕	〔飛来した蝶〕
ザボン	アゲハ、クロアゲハ、カラスアゲハ、ナガサキアゲハ
サンショウ	アゲハ
オニユリ	ルリタテハ
カノコユリ	ルリタテハ
タカサゴユリ	ルリタテハ
ホトトギス	ルリタテハ
ナガサキマンネン	クロツバメシジミ
カタバミ	ヤマトシジミ
カワラケツメイ	キチョウ
オオアラセイトウ	モンシロチョウ
パンジー	ツマグロヒョウモン
ビオラ	ツマグロヒョウモン
ハボタン	モンシロチョウ
ハツカダイコン	モンシロチョウ

[表1-2]

なぜかヒトツバタゴ（1969年実生の亜高木）の花には蝶の飛来の確認はできていない。

その他目的外？で飛来した蝶たち

ヒメジャノメ

クロヒカゲ

ヒメウラナミジャノメ

小さい庭でも、最初からその目的をもって蝶を呼ぶための庭づくりをすれば、年中かなりの植物を楽しむと共に蝶の訪問を受け、自然の中で飼育観察もでき、すばらしいネイチャーウォッチングの場ともなるのである。昨年（1990）大阪での花博で蝶の野外飼育場があり、（亜）熱帯の蝶が多数放たれており、その中央に糖蜜を入れた容器がおいてあり、これに多数の蝶が群がっていた。庭に植物と共にこうしたものを一つでも用意すれば飛来する蝶の種類や個体数も増すのではないかとも思ったが、他の有害な昆虫も増えるのではないかと考え直してみた。

花と蝶。広い庭である必要はない。蝶を呼べる植物を植えてみよう。きっと自然を満喫できる庭となるだろう。

私の小さな庭に、表に示したような蝶を呼ぶための植物を植えてみた。特に訪花植物としてはブッドレア、草木としてはムシトリナデシコ（実際に私の庭には植え込んでいないが）が最高で万能の花と言えよう。

食餌植物に限られた蝶しか飛来しないが、訪花植物はその範囲が広い。

蝶を呼ぶ庭づくりのポイントは自分の好みの植物であり、蝶の好む花を選び、開化時期を考えて、年間を通じ、いつも何らかの花が咲くように工夫する。そして蝶の固有の食餌植物をうまく取り入れることであろう。〔表Ⅱ〕

蝶には、その生息環境が森林や草原あるいは里や市街地など固有の生息地がある。例えば、前述のホシチャバネセセリは森林の発達しているところには生息できず、またキリシマミドリシジミは、ほとんど標高400m以上のアカガシの林に限られている。従って庭の立地条件にもよるが、私の場合、森林性、草原性の蝶ではなく、広く野や里、それに市街地に見られる蝶が呼べ

飛来した蝶・科別集計 (表Ⅱ)

科	セリチョウ	アゲハチョウ	シロチョウ	タテハチョウ	シジミチョウ	ジャノメチョウ
種名	イチモンジセリ	アゲハ	モンシロチョウ	アカタテハ	ヤマトシジミ	ヒメジャノメ
	チャバネセリ	キアゲハ	キチョウ	ヒメアカタテハ	ルリシジミ	クロヒカゲ
	アオバセリ	クロアゲハ		キタテハ	ベニシジミ	ヒメウラナミジャノメ
	キマダラセリ	モンキアゲハ		ミドリヒョウモン		
	クロセリ	ナガサキアゲハ		メスグロヒョウモン		
	カラスアゲハ		ツマグロヒョウモン			
	アオスジアゲハ		ウラギンスジヒョウモン			
数	5	7	2	7	3	3

る対象となっている。

対馬や長崎では80余種の蝶が記録されているが、このうち迷蝶と呼ばれる有方から気まぐれに飛来する蝶、それに森林性、草原性の蝶を除くと比較的限られた数にしばられ、現在飛来種数は27種となっている。当然飛来するだろうと思われる蝶、例えばツバメシジミなど未記録だし、今後に期待したいが、飛来種数としてはかなりの高率だと思われる。

(琴海高校)

むしめがねNo.2 『豆畝にブッドレアを植えよう!』

どなたか、豆畝に自由にできる土地をお持ちでしたら、是非ブッドレアを植えてください。杉会員がきっと涙を流して喜ばれると思います。

分布を拡大するイシガケチョウ

～対馬に土着できる可能性は？～

さかい よしあき すぎ あきら
境 良朗・杉 憲

1 経緯

対馬でイシガケチョウが初めて採集されたのは、1985年、今から7年前のことである。当時の状況からすれば、この個体は迷蝶か、あるいは迷蝶によって一時的に発生したものではないかと考えられた。^{#1}

・1985. IX. 17 上対馬町舟志 1♂ 北脇和光 採集

対馬の蝶類の中で、一見、分布上不可解な欠落種がいる。コムラサキ、ヒメウラナミジャノメ^{#2}、イチモンジチョウなどである。簡単に言えば、これらの種は、何ら分布を阻害する要因がないにもかかわらず、対馬には生息していないのである。多くの研究者が対馬の蝶類の分布について生物地理学的考察を加えてきたが、解決できない問題として今なお残って課題である。

イシガケチョウもそのようなものの一種であった。江島(1986)は、本種の対馬に分布しない要因として、主として気象条件のために対馬への進出が阻害されたのではないかと推論している。

境が、「対馬でもイシガケチョウが採れているらしい」という情報を初めて得たのは、10年前の1981年にさかのぼる。当時、豆蔵小学校に勤務されていた松村氏から伺ったところによると、小学生が巖原町の豆蔵(美女塚付近)で本種を採集しており、標本も存在するということであった。迷蝶の可能性も考えられたが、早速この小学生に連絡を取り、状況を詳しく聞いた。しかし「???」要領を得ず、標本も存在しなかった。希望をいだかせたも

の、『やはり、対馬にはイシガケチョウは生息していないのではないか』との結論に結局落ち着いたのであった。

従って、舟志での記録を迷蝶によるものと判断したのは、当然といえば当然のことであった。事実、次の記録がもたらされるまで数年のブランクがあったのである。

1990年夏、杉から境へ興奮の（実際は、興奮しているのだが、あえて冷静を保っているふりをしている）第1報が入った。

「ようちゃん^{#3}。上見坂〔厳原町〕でイシガケチョウを見たよ。初めはモンシロチョウの大きいのに見えたちゃばってん、葉に止まったところを見たらイシガケチョウやった。1頭だけじゃなかったよ。」

「?・・・、!・・・。（驚きの余り声も出ない)」

この時よほど興奮していたらしく、正直言って呂律が回らなくなり、イシガケチョウのことを間違えて、「スミナガシは・・・」などと、全く別の蝶の名前を口走ってしまったりしたのであった。この年の成果については、杉、小宮両氏の報告に詳しく記録されているので、省略する。この年、当地で小規模の発生があったのは疑いようがない。

このような経緯を経て、1990年を境にし、本種が対馬各地で採集、目撃されるようになった。そして、急速に分布を拡大する傾向にあり、しかも、昨年(1991)は越冬を裏づける春期の記録も出た。

このことから、対馬のイシガケチョウについて1つの仮説を立ててみたいと思う。本種はもともと対馬に生息していなかったと考えるのが妥当であろう。過去、散発的に迷蝶として飛来し、一時的に発生することはあったが、

個体を維持するには至らなかった。しかし、1990年に飛来した個体群は、その飛来の時期、気象条件などに恵まれ、食草であるイヌビワの豊富さも手伝って、世代をくり返すことが可能になった。イヌビワは島内の海岸線から内陸部にいたるまでごく普通に広く分布している。ここ数年、対馬は確かに暖冬傾向にあったが、今後、対馬での土着の可能性は十分考えられると思われる。

II. 分布状況

1991年11月現在までに、筆者らが知り得た（公表、未発表を含む）記録をまとめてみた。対馬には毎年島外から多くの採集者が訪れており、この他にも採集あるいは目撃された記録もあるはずである。

採集・目撃年月日	頭数	記録地		記録者	備考
不明				秋田勝巳	対馬で最初の記録 ^{註1}
85. 9 17		上対馬町	舟志	北脇和光	
91. 4. 9	1 ♀	厳原町	豆酸	杉 憲	越冬個体
5. 24	2 exs.	豊玉町	仁位	境 良朗	第1化の個体(初見)
5. 25	1 ex.		"	"	
5. 26	3 exs.		"	"	
8. 7	1 ex.	美津島町	濃部	"	

8. ?	1 ex.	上対馬町	大浦	小宮秀光	
8. 26	1 ex.	峰町	志多賀	境 良朗	
8. 30	1 ♀.	美津島町	太田浜	"	イヌビワで産卵行動
9. 1	1 ♂	酸原町	豆酸	"	
9. 8	1 ex.	豊玉町	糠	"	吸蜜(植物不明)
	1 ex.		佐保	"	
9. 12	1 ex.	上県町	伊奈	小宮秀光	
9. 13	1 ex.	豊玉町	唐洲	境千壽子	
	1 ex.		貝口	"	
	2 exs.	酸原町	豆酸崎	杉 憲	
9. 15	1 ♂		"	境 良朗	湿地で吸水
9. 16	2 exs.		"	"	
9. 21	1 ex.	峰町	志多賀	境 良朗	
	1 ex.	豊玉町	十善寺トソネル	"	
9. 22	1 ex.	酸原町	豆酸	"	
	1 ex.		豆酸崎	"	
9. 23	2 exs.	上県町	伊奈	"	
	3 exs.		伊奈～越高	"	吸蜜(植物不明)
10. 4	2 exs.	峰町	吉田	"	
	1 ex.	豊玉町	仁位	"	
10. 8	3 exs.	峰町	賀佐	小宮秀光	他に数項目挙
10. 10	2 exs.	上県町	御園	境 良朗	
	7 exs.		志多留～中山	"	

	1 ex.		越高	〃	
10. 12	1 ex.	峰町	志多賀	壽柳喜行	取水
	1 ex.		三根～大久保	〃	
	1 ex.	豊玉町	佐保	境千壽子	
10. 13	2 exs.	峰町	賀佐	境 良朗	
	1 ex.	上県町	大久保～鹿見トンネル	〃	
	2 exs.		御園～越高	〃	
	3 exs.		志多留～中山	〃	
	3 exs.	峰町	賀佐	〃	
10. 21	1 ex.		志多賀	〃	
10. 22	1 ex.	豊玉町	唐洲	境千壽子	
10. 26	1 ex.	峰町	三根	境 良朗	
	1 ex.	豊玉町	糠	境千壽子	
11. 4	数頭		唐洲	〃	
11. 5	数頭		唐洲	〃	
11. 6	4 exs.		唐洲	〃	
12. 16	1 ex.	敵原町	敵原	杉 憲	
12. 18	1 ex.	敵原町	瀬	杉 憲	

註1：1985年以前にも記録があるが、最終年月日を確認できなかった。

註2：本種は恐らく本土の個体が誤って持ち込まれたものと思う。

(小網小学校)

(久田小瀬分校)

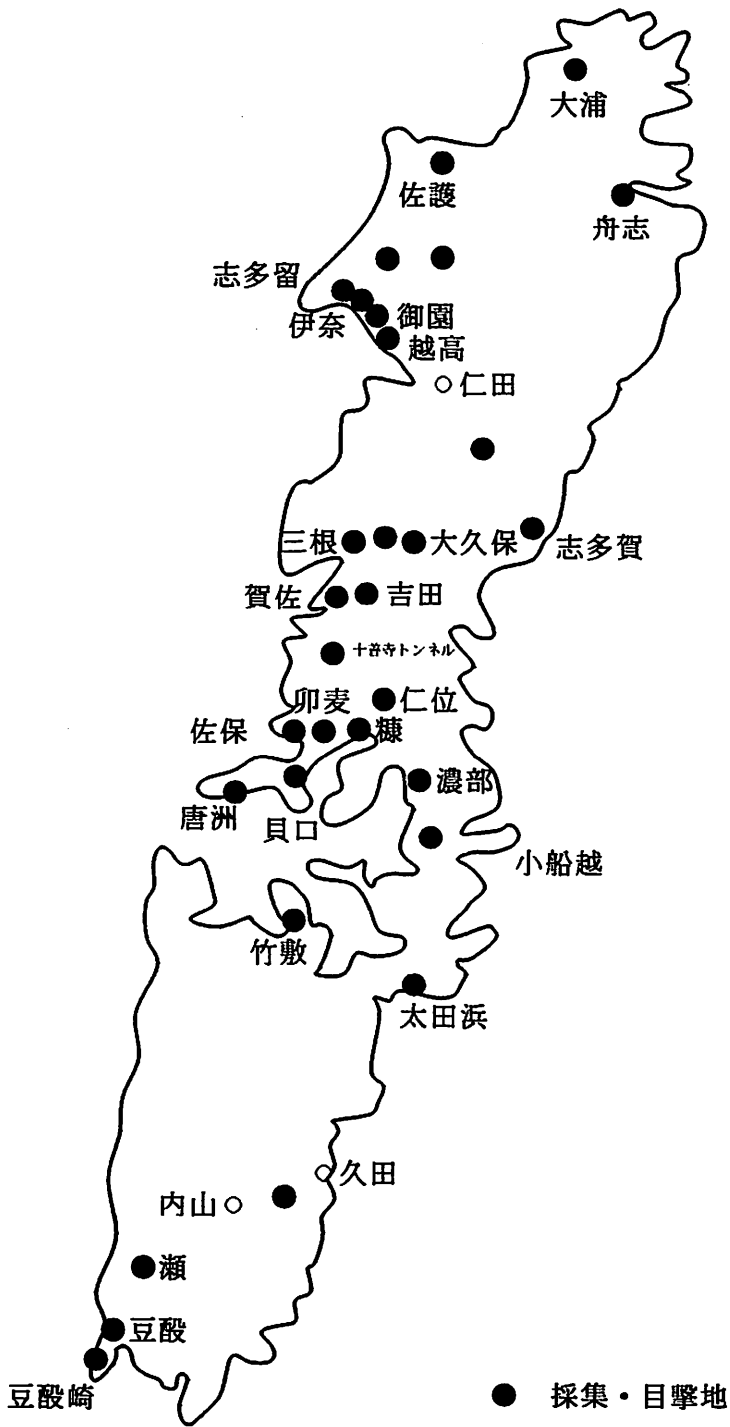


図1 イシガケチヨウの分布図

※ ここまでの本報告は、1991年の冬に書き上げていたものである。従って、タイトルも「土着できるか？」としておいたわけだが、現在（1993）の状況から確実に定着したと考えられる。しかも、対馬のタテハチョウ科では、最も普通に見られる種となった。

分布図も1991年末現在でプロットしているが、今はほぼ全域で確認されているのであまり意味のあるものではない。本種がいかに急速に土着をなし得たかの参考資料として見ていただきたい。

ただ、このような分布の拡大をとげた蝶の中には、5年～10年のスパンでまた突然姿を消す例もあり、今後ともその消長を注意深く見ていく必要は感じている。

むしめがねNo.3 『ビデオで一等賞！』

杉会員が県視連（長崎県視聴覚教育連盟）のビデオ作品部門で、何と何と一等賞にかがやきました。正確には「県教育委員会賞」というのだそうですが、これには、本人が一番びっくりしたということです。去年は、企画賞だったので、2階級の特進。おめでとうございます。

タイトルは『蝶の一生』で、イシガケチョウの一生をテーマとして取り上げています。蝶の変態の各段階で、教育テレビの理科のお兄さんのごとく、杉会員本人が出てきて解説をするのだそうです。その大胆不敵な発想はさすが杉さんだと感心させられます。私は、つつい算数博士の秋山仁さんの姿とダブってしまいました。今年の総会（忘年会）の時に、たぶん披露されると思いますので、お楽しみに・・・・・・・・。

対馬のワシ・タカ類

たにぐちひでき
谷口秀樹

ワシタカ類とは、ワシタカ目に属する鳥類を指しています。これらはワシタカ科とハヤブサ科の2つに分けることができます。

世界中にタカ科の鳥は約220種、ハヤブサ科の鳥は約60種が生息しています。このうち日本にはワシタカ科で22種、ハヤブサ科では7種が記録されています。さらにこのうち、長崎県ではワシタカ科で19種、ハヤブサ科で7種が記録されています。そのうち対馬ではワシタカ科で19種、ハヤブサ科では7種が記録されています。すなわち対馬では、県内で見られるワシタカ類のすべてが記録されていることとなります。

私は、1978年5月に初めて対馬を訪れて以来、ほぼ毎年5月を中心に来島し、観察を続けてきました。また、1990年4月よりは、転勤で当地に赴任して以来、ほぼ2年間にわたり周年の観察を続けています。その中から、特にワシタカ類に限り記録をまとめましたので報告いたします。

前述しましたように対馬では、長崎県内に分布する全てのワシタカ類が記録されています。私は現在までに、ワシ・タカ科で14種、ハヤブサ科では4種の観察をする機会を得ました。

ところで対馬で一番多いワシタカ類はなんでしょうか。その疑問の1つの答えとなるのが、観察日数だと思います。それで見ると、1位トビ、2位ミサゴでいずれも留鳥です。「対馬名物トンビにカラス」という歌の文句もこれで見るとうなずけます。さらに3位ハイタカ、4位チゴハヤブサ、5位ノスリと続きます。これらの順に見られる機会が多いと思われる。

対馬産ワシタカ類の年間生息状況

NO	種名	観 察 月												観 察 日 数	上 州 馬	上 峰 玉	豊 美 島	鞆 原	巖 の 壁	
		1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月							
1	ミサゴ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	79	●	●	●	●	●	留
2	ハチクマ					○				○	○			17	●	●		●	●	旅
3	トビ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	227	●	●	●	●	●	留
4	オオワシ		○									○		2	●	●				冬
5	オジロワシ	○	○	○								○		16	●	●			●	冬
6	ツミ	○	○	○	○	○				○	○	○	○	15	●	●			●	冬
7	アカハラダカ					○				○				11	●	●	●	●		旅
8	ハイタカ	○		○	○	○				○	○	○	○	36	●	●		●	●	冬
9	オオタカ		○	○	○	○				○				6	●	●		●	●	冬
10	ノスリ	○	○	○	○	○				○	○	○		23	●	●				冬
11	サシバ				○	○			○	○	○			16	●	●			●	旅
12	チュウヒ									○				1	●					旅
13	マダラチュウヒ					○								1	●					旅
14	カタシロワシ		○				○							2	●	●				旅
15	ハヤブサ	○	○							○	○	○		7	●	●			●	冬
16	チゴハヤブサ									○	○			24	●	●		●	●	旅
17	チョウゲンボウ			○		○			○	○				9	●					旅
18	アカアシチョウゲンボウ				○	○								3	●					旅
19																				
合計		7	9	8	8	13	2	2	4	8	12	6	8		13	18	3	4	6	11

(佐護小学校)

次に、数の多さを表すものとして、分布の広さが挙げられるでしょう。表を見ると、トビが島内全町に広く分布していることが分かります。ミサゴ、チゴハヤブサ、ハイタカが続き、観察日数と相関しているように思われます。

3番目に月別に観察された種類を見ると、5月が一番多く、10月が2番手に入っています。対馬のワシタカ類は留鳥が2種と少なく、そのほとんどが渡り鳥であることを示しています。このことを裏付けるように、渡りの型で分類してみると、旅鳥が9種で1番多く、冬鳥7種、留鳥2種で渡り鳥の多いことが分かります。

4番目に町別に観察記録を見ると、上県町が一番多く、上対馬町、厳原町と続いています。その頃に観察回数が多いこともあり、その他の町でも観察される種類はもっと増えるものと思われます。

最後に前述したように、私は対馬産ワシタカ類のうち、ワシタカ科ではケアシノスリ、オオノスリ、クマタカ、イヌワシ、ハイイロチュウヒを除く14種を、ハヤブサ科ではシロハヤブサ、コチョウゲンボウ、ヒメチョウゲンボウを除く4種を観察することができました。短期間でこれだけのワシタカ類を観察できたことで、対馬の自然の豊かさを感じることができました。

しかし、この豊かな自然にも、ご多分にもれず開発の波が押し寄せています。ワシ類の渡来地として、県の天然記念物の指定を受けている御岳周辺では、林道建設やダム建設が行われています。オジロワシの最大の罫と思われる御岳でこのような開発が行われることは、ワシの警戒心を考えると無謀としか思えません。開発か自然保護かの論争では、必ず「生活のため」の声に負けてしまう現状ですけれども、この豊かな対馬の自然をもっと多くの人に知ってもらおうことで、少しでも残すことができたらと思っています。

(佐護小学校)

シロバナナワシロイチゴ発見

ながどめ ひろし
永留 浩

シロバナナワシロイチゴは美津島町今里の万年坂の道路わきの藪地で発見した。1990年7月10日、散歩していて緑の草地の中に黄色い果実を見つけた。近寄って見たらキイチゴに似ているが、房状果であったのでキイチゴでないことが分かり、ツルをたどっていくと花も付いていてナワシロイチゴであることが分かった。

このナワシロイチゴは花冠も花糸純白で、ガクも淡い鮮緑色である。果実はヤマブキ色に熟する。つるも白緑色であるが、日当たりの部分は褐色になることもある。

ナワシロイチゴは、バラ科の植物で日本各地の路傍、原野、林縁等に生育しているツル性植物である。ツル・葉・葉脈等には棘が生えている。対馬では、サツキイチゴ、ハラクダンイチゴの名でいたる所に見られ、赤熟する美しいイチゴで酸味は強いが食べられる。

このシロバナナワシロイチゴは、1966年、毫岐の品川鉄磨先生が毫岐で発見されたものである。その記録は植物研究雑誌に発表された。しかし、品川先生はこの植物については詳細に説明してあるが、その他のツル、果実についての説明は記されていない。

(久原中学校)

むしめがね№4 『趣味のかわりめ、年のかわりめ』

小学校4・5年生の頃から、蝶の採集を趣味でやってきた小生であります。中学・高校と続けてきたこの趣味を大学に入ってから若者らしく（別に昆虫採集を熱心にやっている人がおじんくさいとは思いませんが、世間一般ではややねくらの人の趣味と思われる向きがあるようで・・・）音楽活動などにいそしみました。

教職の夢かなって対馬へ帰ってくると、そこには旧知の先輩諸兄が待ち構えており、またバンドを組んで活動できるような状況でもなかったこともあり、いやおうなしにまたあの昆虫採集という悪魔の趣味へと引きずり込まれていきました。小生26才の春でありました。

それでもしばらくは頑張っって野山を駆け回り採集に熱も入っていたのですが、それと並行して覚えていった写真やビデオの撮影（これもやはり旧知の先輩諸兄から仕込まれた趣味ですが、どっちかといえばやっぱりねくらっぽい趣味のようです・・・）のほうの主になってきました。

それでも最初の頃は重い機材を抱えて蝶を追い求め頑張ったのです。しかし相手は生き物。なかなか思った通りにじっとしてはくれません。やっと近付いたと思うとパッと逃げる。また近付く。また逃げる。この繰り返しで約7年が過ぎました。小生33才を迎えておりました。

そして次に知った趣味が植物のビデオ撮影。これはいい。相手は逃げもかくれもしません。あっちからこっちからと自由自在に撮影がで

きます。体力も蝶を追かけるようには消耗いたしません。・・・そして今、小生は37才の春を迎えようとしています。

といったことで、今では植物の撮影が中心になってしまいましたが、年をとっていくとともに趣味の世界もかわって行きます。でもいつでも何かに夢中になっていれるということは、それがねくらの趣味であろうがなかろうが楽しいものです。

みなさんも回りを見渡せば、いろいろできそうなことはいっぱいありますよ。ねくらの趣味でよければお手伝いできるかもしれません。

さあ、ひとつなにかにチャレンジしてみませんか。

* P. S お断りしておきますが、昆虫採集や、植物採集、写真撮影、ビデオ撮影、もひとつおまけにアマチュア無線。これらをやっている人が皆、ねくらだといっているわけでは決してありません。

小生幼年の汀よりスポーツと名の付く物がまったくの苦手で、あの華やかな世界にいつしか嫉妬をするような青年へと成長し、今では自分の趣味を卑下するようなねくら人間に育ってしまったのです。

早い話、ねくらなのは趣味のほうではなく、小生自身なのであります。だれかこのねくらの中年を救ってくださいー・・・・・・・・。

すぎ あきら
(杉 憲)

最近見た白花の植物5種

こくぶ ひでとし
國分英俊

注意しながら道を歩いていると、時々、普通でない花をみかけることがあ
。ここで普通でないというのは、ほとんどの花が赤色なのに白花が咲いて
いるというようなことである。園芸的には大変価値がある植物もあるが、今
の白花の植物については、普通の草であるからただ珍しいというだけであ
う。

〔ヤマハッカ白花〕

ヤマハッカは普通、晩秋に青紫色の花をつけ、道路ぎわをかざってくれる
植物であるが、美津島町で十数株、青紫色の花に混じって咲いているのをみ
つけた。

〔ツリフネソウ白花〕

ツリフネソウは9月運動会が各地で行われるころ、水気の多い川のふちな
で群落をつくり、紅紫色の花をつける植物であるが、上県町で2か所、白
のツリフネソウが自生しているのをみかけた。

〔ツルリンドウ白花〕

ツルリンドウは初秋、つる状の茎に薄紫色の花をつける植物である。花が
いたあと、あずきいろの大きな実をつけ美しい。ツルリンドウの白花につ
ては、以前から数回採集され栽培されているのを見たことがあったが、今
、巖原町で1株自生しているものを発見した。

〔キツネノマゴ白花〕

農業をする人を困らせる植物のひとつにキツネノマゴがある。お世辞にもこの花が美しいとはいえないが、よく観察してみると、なかなか可愛い花である。普通は薄いピンクの花であるが、巖原町で白花を発見した。

〔ツシマギボウシ白花〕

ツシマギボウシは川のふち、谷間から水が流れ出しているような場所を好んで自生しており、8月を中心に青紫色の花をつける。全島に分布している白花については、私の知っているだけでも3か所あったが、道路工事でなくなってしまうている。今回、美津島町で発見されたが、この場所も近いうちに、道路拡張工事により消える運命にある。

今回、偶然にも5種類の白花の植物を発見したが、よく観察すると、もっと多くの植物に、突然変異でできた普通と違う花をみいだすことができると思われる。ぜひ、道端の植物に目をむけてほしい。

(今里中学校)

むしめがねNo.5 『会員異動と新入会員紹介』

江頭会員が転出されました。

新住所：〒850 長崎市江川町333 県農林部林務課

(Tel 0958-78-5139)

新入会員

大林隆司 〒189 東京都東村山市青葉町2-35、10-302

迷蝶なんて知らないと言われる方々へ、ちょっと迷蝶について説明。日本の名蝶はオオムラサキという蝶で切手のデザインにもなっています。その名蝶じゃなくて迷蝶。字の如く迷い蝶でありまして、南方の亜熱帯～熱帯地方から強い季節風（または台風）に乗って、はるばる対馬までやってくる蝶たちのことです。距離にすると数千キロに及ぶこともあります。

従って、彼女？たちにとっては、対馬の冬はまさに地獄の寒さでありまして、残念ながら越冬できず死滅してしまいます。また、そういう勇気のある蝶は非常に少なく、私たちが目にすることができるのは、ほんの偶然のなせるわざということになるわけです。

それでは本題に戻って、今年の夏の豆蝸でのお話。いつものように豆蝸に迷蝶に会いに行ったS氏。迷蝶はなかなか姿を見せてくれず、あきらめかけたその時です。偶然とは突然訪れるものです。

暑く照りつける日差しの中、やや疲れ気味のS氏の真正面から、S氏に向かって1頭（蝶は馬や鹿のように1頭、2頭と数えるのです）の蝶が弱々しく飛んできました。「アサギマダラだ！」さすがS氏。蝶の研究歴25年のキャリアはだてではありません。アサギマダラは迷蝶ではありませんが、なかなか美しい蝶であります。余裕をもって見送ることにしました。蝶は次第に近づいて来ます。見つめたS氏。「ん??・・・ぎゃあーっ！」何と、今自分に向かって飛んできてくるのは、アサマダラなんかじゃない、見たことのないマダラチョウ科の迷蝶ではありませんか。

頭はパニック状態。ただただ、がむしゃらに捕虫網をふりまわしました

が、パニックに陥った脳が手足に冷静な指令を送れるはずありません。数秒後、S氏の目に映ったのは、風にわずかに揺れるからっぽの網と、数十メートル先の上空を飛び去る『まぼろしの迷蝶』だったのです。心臓の鼓動だけが、強く体を打っておりました。・・・・・・

偶然が突然おこり、必然の結果となってしまいました。

S氏には私から心よりなぐさめの言葉を送りたいと思います。

「俺だったら採っていたのに。」 (完)

※本文に登場する人物、状況設定の3%はフィクションです。皆さんに迷蝶のことを知っていただきたくて書いてみました。

むしめがねNo.7 『新刊および会員の論文紹介』

前会長である浦田明夫先生が「対馬の野生たち・国境に生きる」という本を出版された。これまで先生が研究されてきた多くの生物に関する論文を集大成されたもので、これから対馬の生物を研究しようとする人の良き指導書となるであろう。

会員近著

谷口秀樹 (1993) ツシマヤマネコを追って 長崎県生物学会誌 第42号

浦田明夫 (1993) ツシマヤマネコ・滅びゆく日本の動物50種 築地書館

邑上益朗 (1993) 西九州のワスレグサ属の分類地理学的考察

北松南高紀要(6)

こくよ ひでとし
(國分英俊)

むしめがねNo8 『晩秋に鳴くセミがいるのを知っていますか』

問題：対馬にいるセミの種類をいくつか言えますか？

どうだったでしょう。5種類言えた人は、自然への感心度は◎。4種類は○。3種類以下の人は△といったところでしょうか。小さい時のセミ採りの経験はだれもがもっているのではないかと思います。名前や鳴き声となると以外に分からないという人が多いものです。

ところで対馬には、晩秋（10月下旬～11月中旬）に鳴くセミがいるんですがご存じでしたか。チョウセンケナガニイニイという長い名前が付けられています。意味は朝鮮半島に生息する長い毛をもったニイニイゼミというところでしょうか。いわゆる北方系の昆虫で日本では対馬だけに生息しています。ただ、対馬のどこでも鳴き声が聞かれるわけではなくて、今まで確認されたのは数か所です。是非鳴き声を聞いてみたいとおっしゃる方へ秘密の場所をお教えしましょう。峰町の「新佐賀トンネル」の周辺の林です。時間帯にもよりますが、80%以上の確立は保証します。樹の高い所で鳴いていますので、姿までは見ることはできないかもしれません。それでは頼りないと思われる人は長岡会員に連絡をとられるとよいでしょう。特に若い女性の方は歓迎されると思います。

最後に問題の答えを。

ニイニイゼミ、アブラゼミ、ミンミンゼミ、クマゼミ、ツクツクホウシの5種とチョウセンケナガニイニイを加えた6種です。

（おまけ）よく知られる松尾芭蕉の『しずけさや岩にしみいる蟬の声』のセミの鳴声はニイニイゼミであるという説が有力だそうです。

10月31日、恒例の白岳登山がありました。自然への意識が高まってきたのか、年ごとに一般参加者が増え続け、今年はとうとう50名の大台に乗り盛況でした。ただ、お世話をする生物研の方が10名に満たず、参加者に十分に対応できなかったのではないかと反省しています。

今年の白岳登山で印象に残ったことをいくつか紹介します。

○小宮ジュニアが**ん**ばる

小宮^{よしい}英博君（4才）、最年少の参加者でした。登りの全行程を大人の助けを借りず、がんばり抜きました。もちろん英博君のそばには、温かく見守る父、秀光会員の姿がありました。

○中**学**生が**ん**ばる

頂上近くになって、参加していた中学生の生徒がごみ拾いをしてくれました。自主的な行いに頭が下がると同時に嬉しくなりました。最近では大人、特に母親のそういうことへの意識が低くなったということが話題になりました。それにしても、常にリュックの中にごみ袋を携帯しておられる山村会員はさすがです。

○清流のおたま**じゃくし**

中腹の清流付近での会話。

Y 「おーい。川ん中に、まーだ、オタマジャクシがおる。」

「今年は寒いけ、カエルになりきらんとばい」

S¹ 「ほんと、ですねえ。」

S² 「Yさん。あれは、サンショウウオじゃないとですか？」・・・

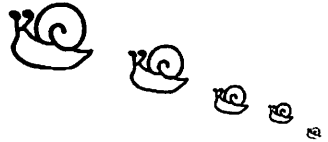
むしめがねNo.10 『サザエになったカタツムリ』

1か月ほど前のことです。わが愚息が家の玄関口でなにやらごそごそとやっています。見ると、カタツムリの殻のてっぺんの部分に小さな穴を開け、その中に細い草の茎を突っ込んで、こちょこちょとつついています。

「なんしょっとか！」

「お父さん、カタツムリの殻の中身を見たことあるね？ こうしたら取れっとよ。」

「だれに教えてもらうたとか？」



「担任のM先生」

半信半疑でしばらく見ていると、やがてカタツムリは狂ったように体をひねり出し、徐々に殻を脱いでいき、とうとう殻がすっぽりと抜けてしまいました。

その姿たるやサザエになったカタツムリで、なんとも悲しいものでした。

「あわれやのう。もうすんなよ。」

「うん。また殻ができるかねえ？」……

小さい頃に、トンボの尻尾に草の茎をさして飛ばしたり、セミの目をへこませて空中高く昇らせ、トビやカラスに食べさせたりしたことがあるのを思い出しました。子供の頃は、今考えると残酷なことでも結構やっていたような気がします。今の子どもたちはどうなのでしょう。この時期のこうした経験はあながち悪いこととは言えないと思います。道端のダンゴムシでもさわろうものなら、「汚いでしょ、ああ気持ちが悪い。」と叫ぶ母親がいる今の時代からすれば、かえって幸せだったのかも知れません。

むしめがねNo.11 『白岳山頂のツシマフトギス』

白岳山頂付近（標高500m）で、ツシマフトギスを観察したので報告する。 ・1993年10月31日 白岳 1♀

本種は発見当時、大陸に分布するものと同種と見なされていたが、最近の研究により対馬特産の新種として扱われている。今回の観察で、低地から高地まで幅広い垂直分布をしているものと思われる。

むしめがねNo.12 『文献紹介：対馬におけるオニユリの

調査・採集の記録と自生環境』

著者 野田昭三・林 一彦 大阪学院大学 人文自然論叢 第25号

対馬のオニユリについての調査報告書です。本調査には岡部虎男、國分英俊会員も協力されています。主な内容は、

- ・対馬におけるオニユリ研究の経過と調査・採集の記録
- ・核型と外部形態 ・自生環境
- ・対馬におけるオニユリの栽培と人里性

となっています。

考察の最後で、対馬のオニユリについて、対馬はオニユリ本来の自生地であると判断できること、その根拠の一つに、過半数が三倍体オニユリの原型である二倍体であることをあげています。また、さらに大陸の自生地の調査・研究の必要性も指摘しています。30枚のカラー写真の資料付き。

興味のある人は國分会員に連絡してみてください。

対馬のルリボシヤンマの記録について

さかい よしあき
境 良朗

対馬にルリボシヤンマが産することを初めて記録したのは境（1976）である。しかし、その後、追加の記録がなされないまま経過し、この間、何人か同好者からその記録の真偽を指摘されていた。報告者が筆者になっていることもあり、また、これ以上同好の諸氏にご迷惑をかけることはできないと見え、この記録の報告に至るまでの経緯をお知らせするとともに、記録の取り扱いについて私見を述べてお詫びにかえたいと思う。

〔報告までの経緯〕

まず問題の個体であるが、厳原町宮谷産の個体は確かに私が採集したものがある。採集直後、今までに採集したことのない種類だったのは記憶している。しばらくは三角紙のままで保存しておくことにした。

その後、当時、対馬高校に勤務しておられた江島氏より、『壱岐の生物』の短報の原稿を依頼され、「おもしろいヤンマを採っていますが、同定できません。」と答えておいた。しばらくして、再度依頼を受けたので同定させていただくことになり、氏宅へお邪魔することになった。標本をお見せすると、上部付属器を調べられ、ルリボシヤンマであると即座に同定された。津島町濃部の個体については、これと同じトンボが濃部でも採集されたことがある旨告げておいた。宮谷産の標本は、必要でなかったので江島氏に預け、後日、九州のルリボシヤンマについての資料を送付していただいた上で原稿を仕上げるという約束をして引き上げた。

『壱岐の生物』の編集の都合もあったのか、その後、江島氏より電話があ

り、原稿はこちらの方で書いたが、それでよろしいか。ということであった。私も、お願いします。と答えておいた。以上が報告までの経緯である。

〔記録の取り扱いについて〕

経緯がどうであれ、報告者が私になっている以上、全ての責任は私にある。『壱岐の生物』の出版後の問い合わせに対して、江島氏に相談したこともあったが、「間違いなくルリボシでした。」との返事をいただいている。しかし、追加記録も得られず、また標本も現存しない今、（江島氏に預けた標本の所在は分からない）対馬において本種の分布を証明する材料は無い。問題の個体が真にルリボシヤンヤであったのかどうかを確認することはできない。

従って、現段階では、筆者としてはこの報告の記録を抹消しておくのが適切な処置であろうし、報告者としての責任であろうと考えている。

最後ではあるが、この件に関して発表を進言していただいた長崎昆虫同好会の池崎義博氏に感謝したいと思う。

※本報告は当初、長崎昆虫同好会誌『こがねむし』に投稿する予定で書き上げたものである。

（小網小学校）

むしめがねNo13 「ツシマヤマネコ人工増殖計画」

いよいよツシマヤマネコの人口増殖計画が動き出した。来年2月にかけて10頭程度を捕獲し、福岡動物園に空輸する予定。経費面は、どうなっているのだろう。人口増殖は最後の手段であるので、できれば全ての問題をクリアーした時点での捕獲が望ましいのだが、。。。。。

むしめがねNo.14 『会の名称を考えてください』

この会は十数年前、長崎県生物学会の対馬支部として発足しました。そのため、会の名称も当初は「長崎県生物学会対馬支部」という非常にいかめしいものでした。会誌の中身も学術論文が多かったようです。

その後、県の生物学会とは組織上関係を持たない、独立した会として再スタートしました。この時、会の名称も『対馬生物研究会』と改められ、対馬の自然や生き物、自然写真に興味のある方なら、だれでも気軽に楽しく参加できる会にしたいというのが願いでした。

この間、徐々にですが、学校の先生方を中心に会員数も増えました。しかし、研究会という響きがネックになってか、一般の方の参加がほとんどありませんでした。

「研究会だから、何かか研究するんでしょう？」「わたしは、何も研究なんかしてないから。」

というように、堅苦しいイメージを持たれることが多いようです。

そこで、昨年度の忘年会（総会）の時に改称の提案があり、出席者でいろいろと知恵をしばりましたが、なかなかこれといったものがなく、1年が過ぎてしまいました。

どうか皆さん、会の趣旨にそった会の名称を考えてください。研究会とか守る会というイメージから抜け出し、新しい発想をお願いします。

採用の方には金一封といきたいところですが、何せ年会費1000円の乏しい活動費です。その点をご容赦いただきたいと思います。

対馬生物研究会 → ????

1994

対馬生物研究会

会員住所録

※・諸連絡用にご利用ください・Noは会員番号です。

・誤記、変更があったらお知らせください。

作成

NO	氏名 (ふりがな)	住 所	勤務先	TEL(住)
1	内野俊哉 うちのとしや			
2	浦川虎郷 うらかわとらさと			
3	浦田明夫 うらたあきお			
6	岡部虎男 おかべとらお			
7	園分英俊 こくぶでとし			
9	佐伯正發 さいきまさはる			
11	境 良朗 さかいよしあき			
13	杉 憲 すぎあきら			
14	長瀬節雄 ながせせつお			
15	永留 浩 ながどめひろし			
17	平山俊章 ひらやまとしあき			
18	邑上益朗 むらかみますお			
23	小宮秀光 こみやひでます			
25	大野正男 おのまさお			
29	谷口秀樹 たにぐちひでき			
31	笹山万尚 ささやまかずひさ			
32	水上 靖 みずかみやすし			
34	長岡秀樹 ながおかひでき			
35	山村辰美 やまむらたつみ			
37	江頭晴司 えがしらせいじ			
38	平山年春 ひらやまとしはる			
39	森 悦子 もりえつこ			
40	宮内富美子 みやうちふみこ			
41	松藤由美 まつふじゆみ			
42	斉藤順子 さいとうじゆんこ			
43	大林隆司 おおばやし			

仲間をもっとふやしましょう！

対馬生物研究会会則

- 第1条 (名称) 本会は「対馬生物研究会」と称する。
- 第2条 (目的) 本会は対馬の生物の研究、観察、調査を通して自然への理解を深め、自然保護意識の高揚をはかり、その情報や知識の普及、会員相互の親睦をはかることを目的とする。
- 第3条 (活動) 本会は第二条の目的を達成するために、次の活動を行う。
- 1 対馬の生物の分布、生態に関する調査
 - 2 会誌「ヒトツバタゴ」連絡誌「ひとつばたご通信」の発行
 - 3 研修会、談話会の開催
 - 4 各専門分野の研究の促進、情報交換
 - 5 自然観察会の開催、指導
 - 6 自然保護育成への働きかけ
 - 7 写真展の開催
 - 8 その他
- 第4条 (組織) 本会は本会の目的および活動に賛同する者をもって組織し、年齢、職業等を一切問わない。
- 第5条 (会費) 会員は別に定める会費を納めるものとする。
- 第6条 (役員) 本会に次の役員を置く。
- 会長 1名 運営委員 若干名
- 役員は会員の中から、その任期が終了する前の総会において選出され、会の基本方針に従って会務を執行する。任期は3年とし、再任を妨げないが本人の意向を尊重する。
- 第7条 (会計) 会計年度は1月1日にはじまり12月31日に終わる。

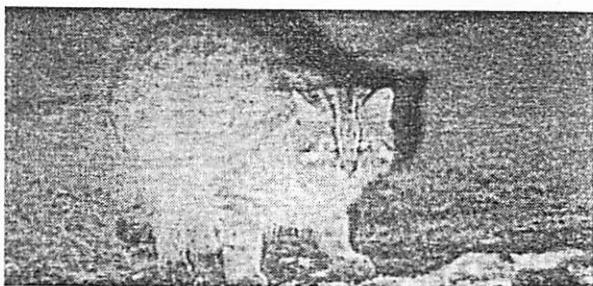
- 付則
- 1 本会の運営費は会費および寄附金等による
 - 2 本会の年会費は1000円とする
 - 3 本会の事務局を次の場所に置く
下県郡美津島町今里401 國分英俊 (09205-3-2007)
 - 4 本会則は昭和61年1月1日より施行する。

見る聞く探る

ツシマヤマネコ を求め攻防戦 ツシマ

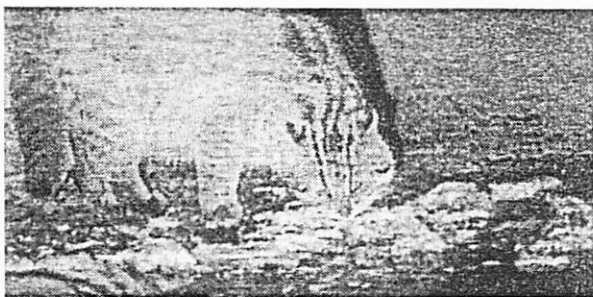
3年越しの張り込み実る

対馬だけに生息し、国の
天然記念物に指定されてい
るツシマヤマネコが、同じ
天然記念物のツシマヤマネ
コ(ニホンヤマネコ)と
対馬だけに生息し、国の
天然記念物に指定されてい
るツシマヤマネコが、同じ
天然記念物のツシマヤマネ
コ(ニホンヤマネコ)と



異常感知

ヤマネコ「私、ツシマヤマネコよ。シ、右の方で何か、気配がするわ。ほら、私の右耳が右方向に向いてるの分かる？ いつも邪魔ばかりするツシマテンかしら、いやねえ」⇒写真は、いずれも対馬・上県町で、谷口秀樹さん撮影の8、9ビデオの静止画像。(注 ツシマテンの性別は不明だが、オスと仮定しての想定問答)



警戒解除

ヤマネコ「気にしないで、食べようっと。この餌、トリのガラとミンチなんだけど。学校の先生風の人が毎日夕方、置いて行くの。最初はワナじゃないかと用心したけど、ツシマテンも食べてたし、毒じゃなみたい。奇特な人間もいるものよね」



負けないはずだが、また若
いヤマネコなので、力関係
のなごうい話を聞いてい
る。

奇襲

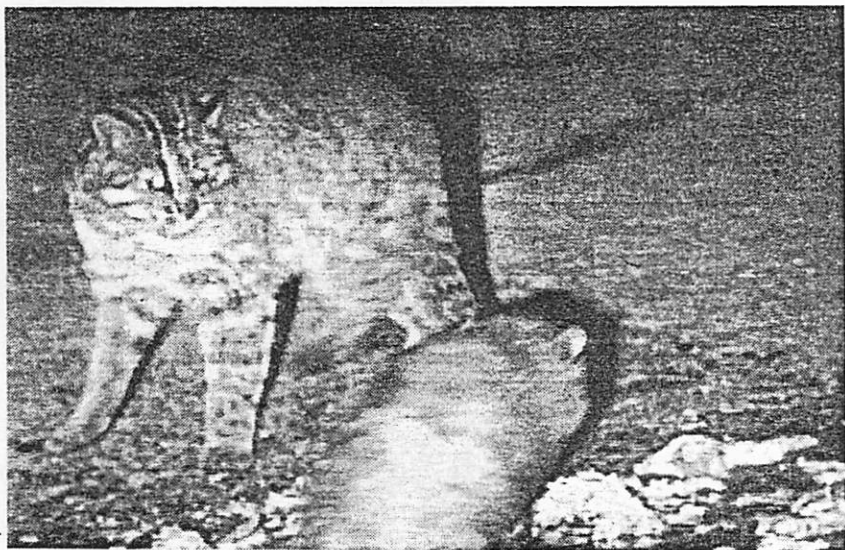
テン「こらあっ、ここはおれの場所だ。出て行けー」ヤマネコ「きゃーっ、何ずんのよ」

上県町の先生が ビデオ撮影成功

餌(ニ)付けを始めた五カ
所のうちの1つが、十月
末に初めて、ヤマネコ二頭
が発見された。一時、現れ
なくなっていたが、二月十五
日、この場面に遭遇した。
餌を置いて間もない午後
七時前、まずツシマヤマネコ
が現れ、周囲を警戒しての食
平開始。十数分後、テン
がまじりヤマネコが登場し
た。
撮影したヤマネコは、頭
部長約五十センチのメス。テ
ンに餌を渡すが、警戒心の強
い相手なので二十分間は餌
を渡さなけり知った。
現場では、ヤマネコの保
護・増殖対策として島内九
カ所で給餌(せいきじ)、
観察をしているが、観察で
きる場所はほとんどない
といっている。観察は難し
い。

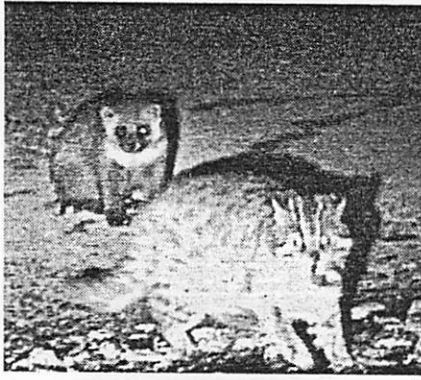
かみ切られるに「あつたお」テン「めん、きつへ離けちかしたは」

応戦態勢



「くらみ合っ」

ヤマネコ「大体、おなかいっぱいになったから、帰るわよ。でも、1個だけ持って行こうと。言っとくけど、けんかに負けたんじゃないからね。バイバイ」テン「それでいいんだ、それで。早く行きゃいいんだよな」



退散

ヤマネコ「大体、おなかいっぱいになったから、帰るわよ。でも、1個だけ持って行こうと。言っとくけど、けんかに負けたんじゃないからね。バイバイ」テン「それでいいんだ、それで。早く行きゃいいんだよな」



夕刻、餌付けに出かける谷口秀樹さん
＝対馬・上興町の山中で

対馬の野生 『国境の島に生きる』を出版

境 良朗

本会の初代会長であり、現在も長崎で活躍されている浦田明夫先生が、長年のご研究を集大成した上記の本を出版された。

私ごとで恐縮だが、先生との出会いは今から26年前に逆のぼる。当時中学3年生だった私は、本格的に昆虫（特に蝶類）の調査を始めたわけだが、当時、情報を手に入れる手段はほとんど無く、わずかに全国誌の「昆虫と自然」が発行されていただけであった。そんな時、先生が対馬高校に勤務されていることを知り、中学生の分際で厚かましくも、生物教室にお訪ねした。以来、高校時代にはキャンプに連れて行ってくださったり、お宅にお邪魔し、夜遅くまで生物の話に花を咲かせたり、貴重な文献を貸していただいたりした。先生に育てられたようなものである。現在は長崎市にお住まいで、少し対馬とは離れられた。対馬に住む者としてさびしさはあるが、精力的に研究に取り組んでおられる姿は昔も今も変わらない。今後益々のご活躍をお祈りしたいと思います。

内容紹介 本書は5部から構成されている。

1. 昆虫類 蝶・クワガタ・ホタル・シテムシ・トンボ・セミ・カメムシ・その他 対馬の昆虫相の特異性
2. 両生類 特徴と系統・両生類相の成因・無尾類の系統・ツシマサンショウウオ
3. 爬虫類 なりたち・カメ類・トカゲ類・ヘビ類
4. 鳥類 留鳥・夏鳥・冬鳥・旅鳥・その他の希少種
5. 哺乳類 起源・ツシマテン・ツシマジカ・ツシマヤマネコ

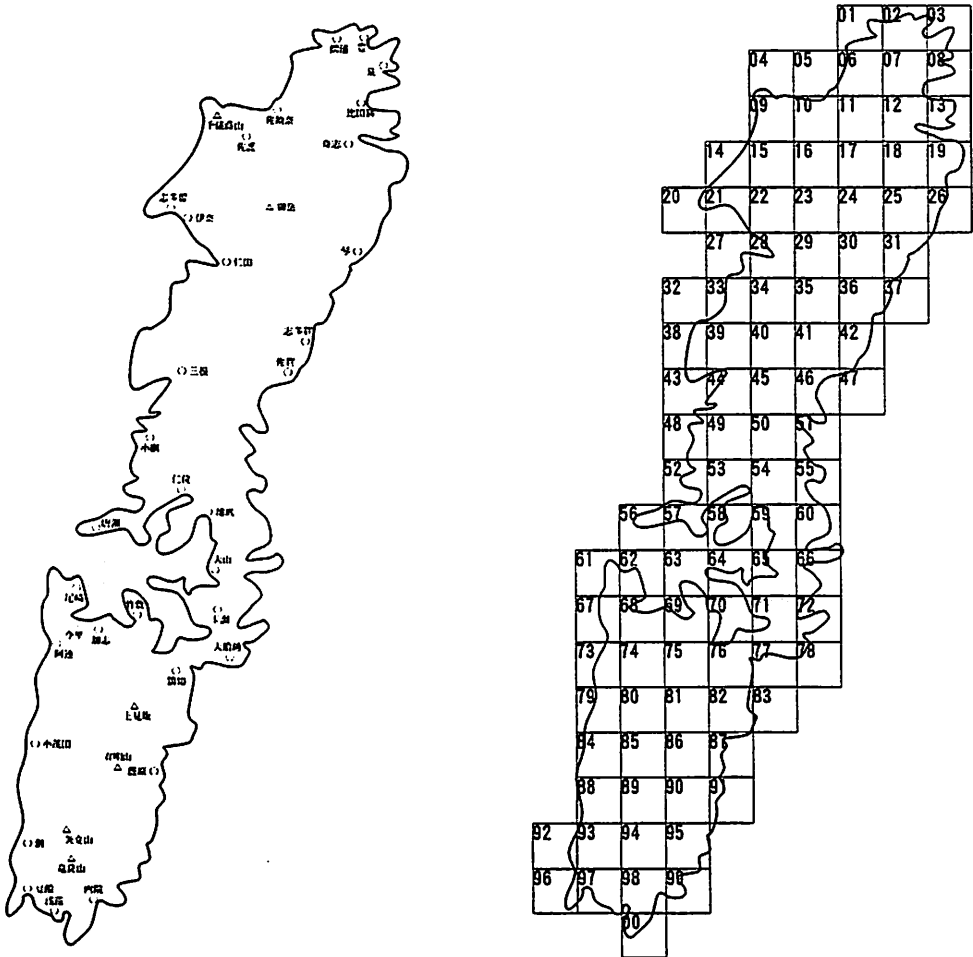
対馬の白地図の利用について

編集部

報告文で分布図等を入れたいときに利用していただくため、対馬の地図をワープロで作ってみました。おおよその体裁をメモ程度に書いていただければ、編集の方で作成します。

(例1)地名をあげ、記号を指定する。

(例2)一定地域を網かけする。



◎◎◎◎◎ 編 集 後 記 ◎◎◎◎◎

昨年はどうとう会誌を発行することができず、特に、投稿いただいていた会員の皆さんにはご迷惑をおかけしました。

何人かの方から「会誌はどうなっているのか。」という催促をいただきましたし、何とかしなければと思いつつ、一年遅れになってしまいました。申し訳ありません。

責任上、9号を発行してから次の方へ編集局をバトンタッチをしようと思ひ、気持ちを奮い立たせて印刷製本に取りかかりました。長年、編集のお世話をさせていただいての所感を最後に述べさせていただきます。責めを終わりたいと思います。

- ・ 学術論文的なものからちょっとしたメモ的なものまで、幅広くだれでも気軽に投稿できる会誌づくりを目指してきたつもりですが、やや内容が堅かったようです。そのお詫びのつもりで、本号から勝手に「むしめがね」コーナーを新設しました。みなさんの協力でNaをどんどん増やしていきましょう。
- ・ 会誌の発行時期については、情報（観察記録）の新鮮さから言えば年末がベストなのですが、原稿の打ち直し、印刷（コピー）製本ということになれば結構時間もかかりますので、年末より夏の8月の方が何かと都合がよいようです。御一考をお願いしたいと思います。
- ・ 連絡誌『ひとつばたご通信』が休刊状態に陥っています。B5判程度でもいいと思いますので、是非復活させていただき、ホットな情報を流していただけたらと思います。そういった意味でも、お世話される方は大変だとは思いますが編集局と事務局（会計）は同じ所に置いていたほうがよいようです。

*
* ヒトツバタゴ NO. 9 *
* 対馬生物研究会誌 *
*
* 発行所 対馬生物研究会 *
* 長崎県下県郡厳原町今里401 *
* ☎09205-3-2007(酴) *
*
* 発行日 1993年12月11日 *
*
* 編 集 境 良 朗 *
*

目

次

○レッドデータブックに見られる			
対馬の野生脊椎動物	浦田明夫	1~	7
●むしめがねNa1	S		7
○庭に蝶を呼ぶ	浦田明夫	8~	13
●むしめがねNa2	S		13
○分布を拡大するイシガケチョウ	境 良朗	14~	20
	杉 憲		
●むしめがねNa3	S		14
○対馬のワシ・タカ類	谷口秀樹	21~	23
○シロバナナワシロイチゴ発見	永留 浩		24
●むしめがねNa4	杉 憲	25~	26
○最近見た白花の植物5種	國分英俊	27~	28
●むしめがねNa5	編集部		28
●むしめがねNa6	S	29~	30
●むしめがねNa7	國分英俊		30
●むしめがねNa8 ~Na12	S	31~	34
○対馬のルリボシヤンマの記録について	境 良朗	35~	36
●むしめがねNa13~Na14	S	36~	37
・会員住所録	編集部		38
・対馬生物研究会会則	編集部		39
・記事紹介	編集部	40~	41
・浦田会員『国境の島に生きる』	境 良朗		42
・対馬の白地図の利用について	編集部		43
・編集後記			44